

第15回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時 平成28年4月14日(木) 午前10時～12時

場所 京都芸術センター講堂

出席委員(敬称略):

池坊専好委員, 井上八千代委員, 猪木武徳委員, 栗山圭子委員, 佐野真由子委員,
潮江宏三委員, 清水重敦委員, 杉本歌子委員, 鈴木晶子委員, 建畠哲委員,
寺井友秀委員, 西村朋子委員, 湯浅靖代委員, 藤田裕之委員

事務局:

平竹耕三文化芸術政策監, 北村信幸文化事業担当局長, 木咲圭二文化事業推進部長,
土橋聡憲文化財担当部長, 山本ひとみ担当部長ほか

1 開会

2 議事

- (1) 会長・副会長の選任について
- (2) 京都文化芸術都市創生計画, 京都文化芸術プログラム2020の取組状況について
- (3) 文化庁の京都移転及び2020年に向けた国・東京の動向について
- (4) 次期京都文化芸術都市創生計画の策定について

3 意見交換

別紙のとおり

4 閉会

(別紙) 意見交換摘録

<会長>

これから 10 年間の京都が目指す文化芸術都市の姿について、委員各位の御意見を頂戴したい。

<委員>

前回平成 19 年に策定され平成 24 年 3 月に改訂された京都文化芸術都市創生計画について、10 年の成果としてどういうものがあったと言えるのか。

<事務局>

資料 1 に則して説明

<委員>

結果的に見て、条例があつて、こういう計画を策定し、年々こういうイベントを実施してきたという経過があるわけだが、これが 1 つの成果として掲げられる何かになっていくこと、それが重要だと思う。例えば、伝統芸能の継承事業を通じて子供達に何かを教えて、その結果として後継者が増えたといったような、目に見える何かに結びついていかないと、せっかくの 10 年間の計画ももったいないような気がする。

京都の文化芸術は表舞台は華やかで、たくさんの事が行われているが、「継承と創造に関する人材の育成等」にあるように、伝統文化や芸能を土台のところで支える人材、放っておけば失われてしまうような表舞台に立たない、舞台裏のワザであったり、技術であったり、重要なものがある。そういった技術を継承していく人材を育てていく取組、また、京都にそういった人材が集まってくるような取組を重視して、次の 10 年の計画に取り込んでいただきたい。

<事務局>

委員の御指摘は、まさにそのとおりと拝聴した。先程はこの間、取り組んだ事業について事務局から御説明したが、御指摘のとおり事業が目的ではない。資料 4 右上に「目指す文化芸術都市の姿」として、①～④に記述している。こういう姿を目指して、様々な事業を行っている。大変難しいことではあるが、こういう施策が現在どういう到達点であるかということ把握して、今後 10 年の計画を検討していきたいと考えている。このことが次期計画策定の上で重要な作業だと考えている。委員の御意見を受けて、各委員の御意見を伺いながら、今後の 10 年間の計画を検討していきたい。

<委員>

一番わからないことは、文化庁の移転についてこれから私達が何をすれば良いのか、まだ雲をつかむような状況であること。その中で身近なことで、例えば、南座が閉まっている。私達がパフォーマンスをすところ、ローム・シアター京都が出来たが、私達は花街にも関わっているので、各歌舞練場の耐震性の問題は大変心配である。また、芸能を支える人たち、舞台屋さんの仕事が、一つの小屋が閉まっている間どうなるのか、そういう細かい所がとても気になる。

色々な文化芸術の勉強をした若い人たちが長く京都にいられるような住まいの問題も重要である。外国から来た観光客のための宿泊施設のことも大事だが、美術家、アーティストが滞在できる住まいの確保についても考えていただきたい。日々の暮らしを支えていくことを考えていただきたい。

そして、オリンピックのことで心配なのは、それに向けてのことにとらわれすぎること、その後のことはどうなるのか、「兵どもが夢の跡」というようなことになれば大変なことだ。京都の伝統産業を支えてきた工芸品を扱う方々は、ずっと変わらず同じことをやってきたが、いつの間にかこちらに風が向いてきていると言っている。そういう動きが京都の中では大変重要なことだと思う。

<委員>

御説明いただいた内容自体については大変納得している。ただ、資料4の「日常の生活シーンの中に文化芸術が溶け込んでいるまち」に関して、行政の縦割りとも関係するかと思うが、芸術というと創出するとか保護するとか、積極的なイメージがあるが、生活環境については、あまり前面に出てこない。

内外から京都にいらっしゃる方が、個々の寺社については美しく整備してあるが、その外に出ると必ずしもそうではないと言うことがある。例えば、街路樹や植え込みが手入れされているか、また以前に比べて相当良くなっているとは思いますが、広告の色とかサイズとか、広告物が環境を害するということがないか、といったことが気になる。消極的な発想に見えるが、素晴らしい芸術にとっての環境、生活環境を整えることも重要だと思う。

ローム・シアター京都のレストランは素晴らしい景観で、音楽も美術もすぐ近くにあるという環境である。京都市全体がそうあるべきとはいわないが、もう少し植木に対する配慮とか、植物を手入れする精神などを含めた生活自体が、外から見てアメニティ、心地よさを伴わないと、芸術活動が生きてこない。こういった観点を行政の枠を越えて御検討いただきたい。

<委員>

個人的なことだが、子供が昨年から東京の大学へ行き、この春休みに京都へ帰ってき

たときに、東京の学生の方が、京都の観光地のことを良く知っている、金閣寺や銀閣寺のことも当たり前のように知っている。ところが京都で育ってきた私の子どもは、今回初めて行って見て、教科書と同じだったなどと驚いている。京都に住んでいる私たちに京都の文化芸術が溶け込んでいるかということ、日常生活に文化芸術が浸透しているかどうかはまだまだだと感じている。このことが今後 10 年に重要なことだと感じた。一部の文化芸術分野の担い手だけでなく、市民全体として底上げをすることが大切だと思う。また、遺産としてというより生きているものとして関わっていくことが、これからの 10 年の課題だと思う。

<委員>

京都にきてようやく 6 年目で、京都について日々わからないことが増えていく、まだわかっていないということがわかっていくという状態。

最近印象が良かったのはローム・シアター京都で、多目的ホールだが、オープニングの井上先生の素晴らしい公演、京響の演奏を含め、伝統芸能から現代芸術まで多様な公演があった。多目的ホールというのは文化政策の中で悪口として言われることが多いが、ローム・シアター京都の場合、多目的ホールであることがこんなに素晴らしいというのは京都ならではのと思った。このことは、ホール自体の演出の素晴らしさだけではなく、京都の底力、伝統的な歴史を長く経たものが、現に生きているものとして存在し、新しい創造に結びついている、それらが小さい空間に凝縮している京都ならではのことだと思った。今ある良さをもっと良くしていくことも今後に向けてのひとつの考え方としてあると思う。京都においては、伝統文化も現代文化もすべてが現代文化であるということをもっと表現してもいいのではないか。

<委員>

古い家を文化財として守っていく立場から、重要文化財と指定された時点で凍結保存ということで、動かないものになった。しかし、固まったまま保存できるかということ、そこにある精神的なもの、見えないものがないと、有形のものも保っていくことはできない。

私たちは日常の中に文化芸術が溶け込んでいる例としてしつらえという形でお見せしている。御覧になった方にどのように残っていくかはわからないが、感動を与えることができれば、伝えていくことができると思う。

京都は待てる町だと考えている。芸術は成熟するのに時間のかかるものであり、結果を急がず、育つのを見守る、そういう役割が京都にはある。若手の体験学習についても、未来に伝えていくためには、単に体験するだけでなく、感動を呼べる何かが大切であり、その意味で本物の魅力というのは大変重要だと思う。視覚芸術に関しては、本物を見ないと感動が呼べない。文化財をしまい込まないで見せることも重要である。一方、触つ

てみることに発見があるものは、レプリカであっても意味がある。レプリカの使い方は検討していく余地がある。

まちなかに暮らして、観光客が増えてざわざわとして、京都市内は京都市民の住む環境ではなくなってきたような感じがするのは淋しいことだが、市民自体が、はりぼての江戸時代をよしとしないで、本物を良しとする精神で表現していくことが大切だと思う。

<委員>

京都の全体をつくっていく中で教育を考えていくことが重要だと考えている。その意味で文化と教育は密接に連携し、これからの10年を考えていくことが重要だと改めて感じた。縦割りでなく連携していく必要があると思う。10年といえば、今年生まれた子どもは10歳になり、今10歳の子どもは20歳になり、情報環境も大きく変わっていく。その中で文化の再定義ということも考える必要がある。文化が架け橋となって外交、政治、経済に影響を与えていくこともある。

文化庁の京都移転が決まったことは、文化をキーワードにしたときに、こんなふうに町が変わるのだということを経済が発信するミッションを与えられたのだと思う。暮らしの知恵、生き方の知恵を育む、生き物を育む文化なのだということを教育の中でも伝えていくことが重要だと思う。

京都大学のプロジェクトで、ドイツのドルトムントの大学との交流がある。ドルトムントはルール地方にあり、工業都市としては有名であるものの文化はあまり蓄積がなかったが、アウトバーン50kmをストップしてアートの日をつくるような大胆な取組を成功させている。地理的にドイツの中心、欧州の中心として文化都市宣言をして頑張っている。

京都のまちもたくさんの文化の資源があり、なぜトイレに花が飾ってあるのか、なぜ正月の食べ物1つ1つに幸福を祈る願いが含まれているのか、こういった豊かさを伝えていくことを考えていきたいと思う。

<委員>

東アジア文化都市2017の準備に関わっているが、ハードの状況として申し上げたいこととして、ローム・シアター京都の成功がある。成功の原因として多目的性があり、当初はオペラを中心としたホールとして進められてきたが、多目的ホールとして完成し、成功している。多目的、言い換えれば総合性を持っているということであり、ワシントンのケネディ・センターに十分対抗できるのではないかと。もうひとつは京都市美術館の再整備。京都市美術館のような総合美術館の中に現代美術を取り込んだことが大変良かったと思う。また市立芸大の移転もある。

京都には東京と同じくらい芸術系大学が多い。これは若い人を育てるという意味で

重要な要素であり、京都から人材を輩出するという意味で良いことだが、京都に残って活動していく、また他都市から来て京都で活動していくという面では、HAPS の活動が画期的な意味を持っており、これを拡大できないかと考えている。また、海外のアーティストを迎えるという面では、京都芸術センターがレジデンス事業を行っているが、需要は確実にあるので、これももっと拡大できないかと考えている。滞在中に、ウィークリーマンションを借りていたりするが、町家に住んでもらうなど、サポートが必要。国際交流基金の京都支部についても、文化庁の京都移転もあり、もっと拡大しても良いのではと思う。

ローム・シアター京都、京都市美術館の例のように、京都がハード面でいい方針を選択していることを嬉しく思う。

<委員>

北海道出身で京都の芸術系大学で学んでいる。京都は何事においても、屋根一つ家一つにしても歴史を感じるものがあって、驚きの連続だった。私自身、京都という場所で制作していることを正直忘れていたことがある。京都でものづくりをするものとして、若手の作家たちがもっと京都という特別な場所で創作していることを意識していくべきだと思った。京都市がされている若手の芸術家のための環境づくりについて、あまり知らなかった。もっと浸透させることも重要だと思った。

若手の作り手が京都でものづくりをしていることに誇りを持っていくことが、これから大切になると思う。

<委員>

資料を見て、京都市の様々なイベント、取組については知らない事も多くあった。もっと一人でも多くの市民に知らせる、浸透させる方法を考えてもいいのではないかなと思う。

芸術だけでは生活が出来ないので副業を持って活動されている人も多く、そういう人たちの活動の場があればいいと思う。また子どもを持つ世代として、小さい子供連れでも楽しめる環境、子供達が文化芸術に触れられるような配慮をもっとしてほしいと思う。

<副会長>

文化庁が来るということで今後、京都の文化芸術がダイナミックに変化していくと思う。この機会に創生計画を見直していくということは重要なことだと思う。この10年の間で、いろいろな成果も出てきている。特別奨励制度によって、まだ枠は小さいが、そこから将来有望な若いアーティストが出てきている。HAPS やアーティスト・イン・レジデンスもうまく回転している。アーティスト達が、例えば、古いガレージを改造し

て、アトリエとして使っていくといったことが、HAPS の活動を通じて市民の理解を得やすくなっていると思う。

私は 30 数年京都市立芸大で教えてきたが、一番大きな変化は、芸大を卒業した人が京都や関西にアトリエを構えて制作するようになってきたことだ。残念なのは、彼らは東京へ行って展覧会を開き、そこで稼ぐことになっている。二重生活になっている。京都の市場が必ずしも大きくない。京都に市場を呼び込むこともこれからの課題になると思う。京都市美術館に現代美術を展示したいと考えたのは、そういう意味もある。将来的にはアート・マーケット、バーゼルのようなアートフェアが開催できるようになればと思う。

伝統的な部分では、京都の近代絵画は値下がりしている。これは美術館の役割であるが、海外市場に向けて、もっと働きかけが必要だと考えている。また、骨董屋さんの話では掛物が値下がりしている。これは生活環境の変化、部屋の構造が変わってきたことによっている。また、私自身の経験で着物の職人のレベル、若手のレベルが下がっている。生活環境の変化もあるが、芸術系の大学と職人の関係が切れているということもあり、芸術系大学と伝統工芸に携わる職人との新しい関係を、調査をふまえて構築していくことを考えないと、このままでは伝統工芸の職人さんはデザイナーの下請けになってしまうのではと危惧する。

美術館も伝統と現代、両方の側面で頑張っていくつもりである。

<会長>

表に見える部分では、京都はハード、ソフトとも文化の盛んなまちであり、良い方向に向かっていることを実感している。ただ文化は行事をすることが目的ではなく、何のために、誰のために、それによってどういう効果が得られるのかということを中心に検証していく意識が必要だと思う。その意味で、日々の積み重ねが大切で、母体となる文化にたずさわる人、職人、私達京都人の足腰をきたえることが大切だと思う。京都に文化庁が来て、多くの観光客が訪れ、文化首都としての役割が求められる中で、そういう時代であるからこそ色々な人が京都に来て、その結果京都が消費されてしまうのではなく、京都の文化創生になるような方向性を模索していきたい。

<委員>

奈良で建築の調査、街並み、景観の調査を行ってきた。特に「文化的景観」に関わり、京都では岡崎の調査に関った。

京都市の都市景観行政は他都市に比べて群を抜いて進んでいるが、文化の観点からは幾分希薄な部分を感じる。文化的景観という考え方とはずれがある。今後文化的観点から景観を考えていくことと都市政策としての景観行政をすりあわせていかないと大きな成果が得られないと考えている。

行政の縦割りとも関係がある。これをどう乗り越えるか、この会議でも考えていきたい。

<委員>

単に事業を行っていただくだけではなく目指す文化芸術都市の姿で挙げられたまちに向かっていくために、行政においても他の分野でも横のつながりをつくっていくことが重要である。京都は文化によって横のつながりをつくっていけるまちだと自負している。コミュニティの中に文化が息づいているまちである。

市民の生活の中に文化芸術を浸透させていくという面では、行政の力だけでなく、市民の力、様々な分野の方々の力が必要である。

「まち、ひと、しごと」という地方創生の標語に京都は「こころ」を加えて、「まち、ひと、しごと、こころ」としている。

文化庁が来ることは、日本の中で京都が果たさなければならないことを検討する良い機会となる。京都の人が京都の文化を取り入れていない、浸透していないという面では、もっと普段の生活の中で取り込んでいける方策を検討していただきたい。